

## 佐々木義登

若松由希久「灰田さんの思い出」(「せる」第11号)の主人公は夫の暴力から逃れて実家に帰っています。偶然中学時代に友人と制作した手作りのラジオドラマのカセットトテープを発見します。一方、職を得た主人公ですが理不尽な対応に苦しみます。そうするうちに中学時代にラジオドラマを作った灰田さんとのその後の記憶がよみがえってきます。それは横暴な父親のせいで孤立し不登校になつていく灰田さんを見捨ててしまつた自らの過去でした。小説後半、自分を追ってきた夫から連れ、かつての灰田さんの家にたどり着いた主人公が、灰田さんの父親を刺殺する、現実とも妄想ともつかないラストは齋藤画論あるかと思ひますが、小説一編のカタストロフとして必然性を感じました。幼少期も、長じても男性の暴力に翻弄される女性、そして被害者一辺倒と思われた主人公もまた同級生に対して罪を背負つた存在であつたという展開に人間というものの底知れない闇を感じました。

木戸岳彦「隣人たちの道」(「季刊作家」第98号)の主人公昭夫は加茂野という地方の町で理髪店を営んでいます。いつのまにかアマゾンからの移住者がそこに住み着いてお

## 加藤有佳穂

渡谷邦「ラストデーのような日」(「あるかいど」第7号)のタナカは夫の暴力から逃れて引つ越し、廃車工場らしき風景の見えるアパートの自室で、夫と住んでいた家から金魚も持つてくるべきだと考え続けています。炎天のある日、決意して夫の留守中に金魚たちを運び出します。死んでいた一匹を埋めていると、白髪まじりの「女」が現れます。声をかけられたタナカは、金魚を持ち帰つてそのまま二匹はまだ生きているだと信じます。女は、「今日はラストデーだけれど」も「あなたは大丈夫かもしない」と言い、自分も夫の暴力のため家を出たがアカミミガメを取りに行けずにいると告白します。そこでタナカは彼女をかつての家へ連れて行き、アカミミガメとワンピースを持ち帰ります。削ぎ落された文章に引力がありました。引つ越し以来積まれたままの段ボール、そこから取り出したスカートの頬ななしあ、枯れた植物に浴びせる水、熱を吸収するアスファルトの感触、女から渡されたワンピースの手ざわり。コントラストの強い写真のように、きつぱりとしているにがランと虚ろな質感のある忘れがたい作品です。

木戸岳彦「隣人たちの道」(「季刊作家」第98号)が描く

り、町の人々から「隣人」と呼ばれています。昭夫の店にも「隣人」を束ねるリカルドという青年がやつてきて交流するようになります。しかし「隣人」たちはただの移住者ではなく、組織ぐるみで何かもくろんでいるようで、村の中でも存在感を示すようになつてきました。そんな折、娘の佳奈がリカルドと深い関係になつていることを知った昭夫は単身彼らの下に乗り込んでいきますが、逆に自分の身を危うくしてしまいます。過疎の町、ひたひたと勢力を拡大する「隣人」たち、主人公の内に脈々と流れる先祖の血、それらが化学反応を起こしてゆく展開は読み応えがありました。長編小説としても成立する物語の大ささを感じました。

菊川香保里「ここにもない」(「バル」第9号)は不思議な作品です。冒頭、知らない街の図書館から、問い合わせせる本が見つからなかつたとの回答が届きます。しかし主人公には身に覚えがありません。この便りは何なのか、様々な憶測が頭をよぎり、やがて昔のピアノの先生の記憶なども蘇り、逸脱に次ぐ逸脱の果て、知らないどこかの街の、そして冒頭に登場していたかも知れない一冊の未知なる本の、最後のページの鳥の羽に、やがて、羽の微かな瀧の香りへと物語は焦点化されてゆきます。様々なイメージがカラージュされたシユールな作品といえるかも知れませんが、いつの間にか読者を遙か彼方へと誘う手際の良さが際立つていました。

中野沙羅「鳥たちは遠くで騒ぐ」(「バル」第9号)は主

のは、高齢化のすむ加茂野と、この地でヘアサロンを営む三島昭夫です。水田の広がるむかしからの風景にも空き家や休業した工場が目立ち、地域の業務や行事に参加する者たちも數を減らしています。昭夫もまた還暦に近づき、廃業を考えています。疲れと諦めまじりに決めた期限の間際、見慣れない青年が散髪にやつて来ます。ブラジルから来たこのリカルドは、伯父の経営する商社の日本支社で働きスパイズやヘーネの輸入を手がけるとともに、加茂野のブラジル人たちと行政や地域住民との仲介者となつていきました。昭夫は、彼の来店をきっかけに、加茂野で「隣人」と呼ばれながら地域業務の欠かせない扱い手になつているブラジル人たちの存在を知り、散髪メニューを作つたり龜の生簀を提供したり、おそるおそる彼らと関わります。コミュニティと自身の老いを前に、矜持と卑屈さを抱え、あたらしい異質な存在に警戒しつつ様子をうかがう昭夫の意識を見事にこつりと描き出していました。

家族やジエンダーをテーマに据えた同人雑誌「融」に熟気を感じました。その掲載作のひとつ、神楽坂いづみ「イレースと濃いつつ」(「融」Vol.2)では、語り手の御影ほのかの通う高校で、校舎内に飾られているルノワールの「イレース」が日々移動し始めます。イレースに重なるのは、進路に戸惑うほのか自身です。大多数が四年制大学へ進学するほか、彼女は家庭の経済的事情により、推薦で専門学校へ進んで保育士になることを選びました。その選択を津

### 【語り手】

主人公「わたし」がかつての恋人とおぼしき、りょう君の身体の一部の記憶をたどりつつ、彼のお墓を自宅の庭に次々に作る話です。友人のナコが訪れ、その墓に闇心を持ちます。りょう君の身体の一部を埋葬し続ける主人公、ハトやスヌーピーたちの死骸、甘い香りのムクゲ、それらが渾然一体となって迎えるラストは不吉な美しさに支配されています。物理的な死と概念としての死、言葉の力でこの二つを括きようとする野心的な試みと読みました。

神楽坂いづみ「幼壙」(『融』Vol.1)は日記形式で書かれた作品です。ニューヨークに本社のある企業でリモートワーカーに従事する主人公「僕」、博士論文を書いている妹、深夜の仕事に勤む父、生活リズムの違う家族三人が顔を合わせることなく暮らしています。ある日、聞こえるはずのない赤ん坊の泣き声が家中から聞こえてくることで、主人公の淡々とした日常が崩れ始めます。赤子は妹が産んだ子であることが作品後半で明かされ、各自分離していく二人に変化が訪れます。一般的な家族の概念が解体した一家を描きながら、その家族が赤ん坊を媒介として新たな形態を紡ぎ始める展開が新鮮でした。

渡谷那「ラストデーのやうな日」(『あるかじ』第7号)の主人公タナカは夫のDVから逃れ、安アパートに引っ越しましたが、家に置いたままにした金魚を連れてこなければという想いにとらわれます。首尾よく一匹の金魚は連れ

て帰ることが出来ましたが、死んでいた一匹を土に返していると年をとった女が現れます。女はタナカと同じような境遇で、別れた夫の家にアカミミガメを残してきたことを悔っています。タナカはカメを連れ戻すため女の元自宅に同行します。カメは持ち帰ることができましたが女は若い男に連れ去られます。女の繰り返す「ラストデー」の具体的な意味、属性などは不明のままでですが、「がら、生き残つたでしょ」という女の言葉がタナカの行く末を暗示するようです。それでもなお不穏な影を拭えないのは、三人称で書き付ける「語り手」が、夫の姓であろう「タナカ」と主人公を連呼し続ける点にあると考きました。物語の外から規定していく、この呼称こそが、主人公の意図を超えて、小説内世界をいつまでも「ラストデー」たらしめていけるのではないでしょうか。

大野瑞紀「ふじっぽ」(『琳琅』第五号)は父や姉から虐待されてきた主人公「ぼく」が、家を訪れた姉の後輩に行方不明の母の面影を重ねる物語です。人体へ寄生する「ふじっぽ」を介して姉の後輩が怪しく「ぼく」を誘う展開が独創的でした。

それ以外では飯田未和「溺れる鳥」(『m o u』Vol.18)、嵯川崇「闇」(『AMAZON』50号)、吉岡稚菜「遷延」(『蒼空』第26号)、峯本雅子「雪の墓標」(『樹林』Vol.67)、沢口みつを「狭山の音」(『こみゅにて』第112号)、青木左知子「人形始末の記」(『浮橋』第8号)を興味深く読みました。

### 【脚本家】

備した担任や母親、その選択について「正しい優しさ」で論す父親、それから逃げたいと思ってしまう自分自身へ向ける視線が青く苦く真っ直ぐで、「階段の踊り場から少女が消えた」という冒頭の一文が力強く響きます。

中野沙羅「鳥たちは遠くで騒ぐ」(『バル』第9号)の語り手は、「りょう君の墓」を自宅の小さな庭に作っています。おそらくはかつて親密な関係であつたりょう君は、まだ生きていますが、語り手は彼の身体の部分を、たとえば太ももは鳥モモ肉を、眼球はナタデココを代わりに見立てて少しずつ庭に埋葬しています。友人ナコが見物に訪れ、そもそも彼女は知らないりょう君の墓に手を合わせるのを眺めていると、彼が「本当に死んでいる気がして」くるのです。市街に見える野鳥の群れを背景に、庭に広がるりょう君の部分の墓、路上のハトの死骸、散ったムクゲの花弁といった死の断片が集積していく様が圧倒的です。

吉岡稚菜「遷延」(『蒼空』第26号)の舞台は商業施設にある書店です。そこには、周囲にはばからず低く大きな声で意味の分からない何かをうなり続ける男性が訪れます。彼が現れるとみな距離を取り、関わるまいと身構えますが、書店員の女性は、遠方を癡根するような彼の瞳を覗き込み、「聞くことも聞かれることも望まれていないが故に、どこにも吸収されることなく磁力を失った砂鉄のようにはうろぼろと崩れ去つて」いく彼の言葉に耳を傾けます。

ある日、彼女は彼が黙つて本を凝視する姿を見かけます。どの本であつたか突き止めたとき、男性のうなり声はリズムを持つものになり、「規則ある」言葉へと姿を変えます。言葉というものを丹念に描く佳品でした。

上地庸子「温もりに遭りて」(『樹林』Vol.67)は、沖縄県宜野湾村に暮らす少女が語ります。家事を手伝いながら尋常小学校に通う日々が續くと思つていましたが、やがて戦況は悪化して空襲が日常になりました。几帳面な筆致をぱりぱりと破つて戦争の轟音が響く作品でした。

飯田未和「溺れる鳥」(『m o u』Vol.18)は、泳げない子龜を拾つた山根の物語です。過去の経験ゆえに女性を恐怖するしかない彼と、喉に詰まらせたためミニトマトを嫌惡する友人の大村との会話に魅力がありました。

人魚をめぐる作品集「海界」にはチクリと刺さる短編が並んでいました。遺品に刀が見つかり父を思う妻馬翔「剣」(『別冊關學文藝』第六十三号)、炭鉱労働者から流れの文選工となつた銀二を描く高瀬博文「黒い街 白い街」(『九州文學』通巻57号)や福集・翻訳者の香子を軸とする翠川優「白い猫」(『ignea』10号)も印象的でした。

【文庫】の種類 ●主な文庫版の著者: 中野瑞紀「ふじっぽ」(『m o u』Vol.18)、吉岡稚菜「遷延」(『蒼空』第26号)、峯本雅子「雪の墓標」(『樹林』Vol.67)、沢口みつを「狭山の音」(『こみゅにて』第112号)、青木左知子「人形始末の記」(『浮橋』第8号)。木尾重彦「黒い街 白い街」(『九州文學』通巻57号)や福集・翻訳者の香子を軸とする翠川優「白い猫」(『ignea』10号)も印象的でした。